OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | <書評>Victor Papanek : "Design for the Rearl World---Human Ecology and Social Change" Pantheon Books, New York 1971. |
| Author(s) | 宮島, 久雄 |
| Citation | デザイン理論. 1974, 13, p. 102-105 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/53662 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

Victor Papanek:

"Design for the Real World———
Human Ecology and Social Change"

Pantheon Books, New York 1971.

日本語訳「生きのびるためのデザイン」

阿部公正訳，晶文社，1974.

「現実の世界のためのデザイン，人間生態学と社会変化」と題するこの本は，最初「環境と一般大衆」という題でスウェーデンから出版され，翌1971年に本題でアメリカ版が出版された。翌72年には「パパネック計画——生きのびる環境のためのデザイン」という題でドイツ語版が出て，ベストセラーになったといわれる。デザイン界では久しぶりの話題の書の出現である。

本書の内容を一言で云えば，既存の工業デザインの仕事は少数者のためのデザインで，不必要なものであり，それに代わるものとして，本当に必要なものを，本当に必要としている多数の人々のために行うデザイン計画を提案している，ということになろう。もう少し詳しく云うと，メーカーのためのデザインから消費者や使用者のためのデザインへ，計画的廃物化や資源浪費のためのデザインから生態学的観点にたったデザインへ，少数の「支配権をふるう中流階級」のためのデザインから，年齢，性別，国別，健康，社会階級などの点で実にさまざまな多数の人々のためのデザインへ，大量生産，大量販売のためのデザインではなく，良質をめざすデザイン，「統合的なデザイン」へ，縦わり専門家的なデザイナーから総合的な視野をもつ普遍家（ジェネラリスト）的なデザイナーへといった「従来の見方とは違ったいまひとつの思考形式」の確立を主張し，そのための具体的な手段としてデザイナー・コミュニティーとその課題を提案する。このように根本的に新しい観点の提唱という意味で本書はきわめてラディカルな内容をもっている。

もちろんパパネックのような見方がいままでなかったわけではない。工業デザインが結局はメーカーの利潤獲得の手段となってきたこと，不必要なモデル・チェインジを繰り返し，資源を浪費し，環境を破壊，汚染し，消費者の虚飾や体面をつくろう心をあおってきたこと（この点では広告デザインも工業デザインと同列である）などに対する批判，反省

は，1960年前後以降，例えばアメリカのパッカードの告発などによって，多くのデザイン関係者の心を悩ませる問題となっており，いまや意識としては少数意見の域を脱しているとさえ云えるだろう。だが，具体的な行動計画を提唱し，実践活動を行うという段になると，問題が複雑で大きく，かつラディカルであるだけにきわめて少数の例しか見出せない。あるいは知られていない，報道されていない，といったほうが正確かもしれない。このような行動に支えられ，その経験が多く述べられている本書はその意味で非常に貴重であるし，それだけ説得力をもったものになっている。本書の最大の評価は恐らくこの点にあるといってよいだろう。

パパネックは本書においてまずデザインの定義について型どおりに6つの機能複合体だとする。即ち，方法（道具，工程，材料の相互関係），効用（うまく用をなすか），必要（本当に人間にとって必要なものか），時代性（時代や状況をよく反映しているか），連想（適切な製品イメージをもっているか），美学の6要素がデザインの機能複合体を構成するというのであるが（第1章，デザインとはなにか），「デザイン行為の社会的価値を確立する第一フィルターとして」故ロバート・リンドナー教授とともに考えた，生存のための環境の諸条件，人間にそなわっている知識，素養，技術といった人間的諸条件，死という生物学的条件という三対の制限を挿入する。例えば現在大問題になっている自動車についていえば，アメリカ的なスタイリングにみられる過剰装飾だとか，ステータス・シンボル的なイメージづけの是非といった機能複合体的観点だけで評価するのでなく，かつて歩いていくよりも遠くへ速く行け，しかも重い物を運ぶこともできた自動車は人間の技術的能力によって環境条件を征服したものであったが，いまや速く走りすぎ，原料を浪費し，不格好な形をし，1年に5万人もの人を事故死させるばかりか，がんを誘発する多量の排気ガスをばらまき，死の条件を支えるものとなっている（第4章，do-it-yourself殺人。こういうデザインをやっていては人類は自分で自分の首をしめるようなものだというわけ)。これに対する解決策は輸送機関全体のシステムを考えることによって容易に得られるという。即ち，850キロ以上の輸送には航空機，850—85キロの間は鉄道，バス，モノレール，その他，85キロ以下は多くの方法があるが，例えばローラースケート，モーターなしのスクーター，自転車，小型電気自動車，そして歩行，これがデザインによる解決策だという（第10章，人目をひく消費者，デザインと環境。consumptive は肺病患者であるが，ここでは消費者と訳すべきだろう。もちろん病的な意味を含めているのである。）ここでいう航空機は騒音と排気ガスをばらまくジェット機ではないし，小型電気自動車は個人所有のものではなく，タクシー，しかも腕時計大の無線機で自由に呼べてクレジット・カードによって支払う式のものである。

自動車の社会的評価はこのようなものであるが，いまのような個人所有システムはそう簡単になくなるだろうか。パパネックはアメリカではすでに所有という習慣は，２，３年おきのモデル・チェインジや所得税法の存在等によって借用という形に代りつつあるという。現実に所有している場合でさえ，何年にもわたる月賦払いと抵当権の設定によって，所有概念は単なる虚構にすぎなくなっている（第５章，わがクリネックス文化：廃物化，性能，価値)。それ故，適当な代替交通方式さえあれば，多くの人が自動車の個人所有をやめるというのである。もちろんそれでも自分でギヤを操作し運転したいという人もいるだろう。彼らのためにはレンターカーがある。例を自動車にとり，交通機関のシステムを考えてきたが，パパネックはこうした解決策は都市交通の問題に対するひとつの答にすぎなく，デザイナーやデザイン・チームはどのような段階にも関係しうるということを示そうとしたのだと注記している。

だがその一方でパパネックは，人間にとって広範囲な必要が，それに伴ってデザインに対する必要が世界中で求められており，それ故新しいデザイナーの十字軍が必要だと強調する（第２章，種族起源殺害：工業デザインという職業の歴史)。ホーバークラフト，モノレール，超小型電気自動車，電池・手動両式の個人用乗り物，多目的量産建造物など先進国むけのデザインについてもふれてはいるが，彼はそれ以上に工業デザインにとって未知の分野，即ち，低開発地域のためのデザイン，知恵遅れの子，肢体不自由児，不具児，障害児のための教育・訓練用器具のデザイン，内科・外科・歯科および病院用設備のデザイン，実験研究用器具のデザイン，極限状態の人間生活を支えるシステム・デザイン，未来への突破口となるようなデザインを強調する。例えば最初の低開発地域むけのデザインの例として，アフリカむけのテレビセット（１チャンネル方式，熱帯用防虫方式，外箱は量産も手工業生産ともに可能，費用はわずか９ドル)，簡易冷蔵庫（古タイヤ利用，手動クランク式，製造も簡単)，住居材としてのように再利用できるパッケージ，トランジスター・ラジオ（ジュースの空き缶利用，パラフィンや乾燥牛糞などの燃焼によるエネルギー利用，費用わずか９セント)，自転車（自転車の部品を使った荷物運搬用三輪車，あるいは動力源として利用できる自転車）などをあげている。

パパネックにとって「デザインという仕事の究極の目標は，人間の環境と道具を，さらに人間自身をも変革することである。」今後農業や工業でオートメ化が進み，コンピューターが導入されれば「(研究，社会計画，創造的革新といった）デザイン・チームの仕事は 人間に残された唯ひとつの有意義で同時に厳しい活動となろう。社会全体のために目標を設定することがデザイナーの仕事となることは必定だろう。」（第２章，第12章）

ここにいたってデザイナーは救世主のような地位を与えられている。このような「テク

ノクラートによるユートピア思想」(ギ・ボンジーペの評, form 63, S. 15) はとくに後半になると多くみられる。例えばいまやるべきことのひとつとして実験的なデザイン環境をつくることをあげているが, その一例として手工作 (クラフト) にもとづく一種のコミューンをあげている。それは永住の場ではなく, やはり教育機関, より正しくは働きながら学ぶ場であり, 一時的であるにせよ, 自給自足的コミューン的作業と生活を建前とし, 共有財産という考えをとるという点で明らかにユートピア的性格を示している。彼によれば, こうした中から「世界中の人々のための新しい生活様式」が生れるという。(第12章, 生き残るためのデザインとデザインによる生き残り：われわれは何をなし得るか) この結論は, 他の二つの結論的提案——ユネスコと共同して「予見的包括的デザインの国際協議会」を作ること (これは包括的予見的デザイン科学の開発を専門とし, 主張するバックミンスター・フラーの考えに賛同したものらしく, パパネックは突然にもち出している。フラーは序文に書いている。) および現在仕事をしているデザイナーがその仕事の1割を (40時間ごとに4時間とか, 10日に1日とか, 10年ごとに1年とか) 現実のデザインの問題解決に転じること——にくらべるといかにも現実ばなれしている。

結局, 本書においてもっとも評価できるのは, 著者自身のデザイン活動の成果である第三世界や身体障害者, 病人, 老人, 子供といった「小数者」——著者にいわせると実は多数者であり, 彼らをクライアントとすることこそ「現実の, 本当の世界のためのデザイン」ということになる (第4章) ——のためのデザインとその思想であろう。

もっともこの点については, やはり自ら第三世界でデザイン活動をしているもとウルム造形大学のボンジーペなどは批判的である。パパネックは, 第三世界のためのデザインとは土着の住民の中にデザイナーの種を蒔くことであって, 先進国の人間がデザインをやることではないといっているにもかかわらず, ボンジーペはデザイン帝国主義の侵略だとさえいっている。たしかに, 先進国はテレビ電話, 第三世界は空き缶ラジオということでは住民は納得すまい。台湾や東南アジアに経済進出しているわれわれも, デザインの点から一考させられる問題である。

最近表記の和訳が出た。著者の指示によって省略されたところに, 日本の製品の例が二, 三見られる。また, ボンジーペからつかれた箇所も省略されている。国民感情を考慮してのこととはいえ, 全体の勇しい調子からは少しふがいないように思う。新語, 俗語の散見する米語を訳者はかなりうまく訳されているようだ。

大阪芸術大学　宮島久雄